

ハナコ婆さんに出会ったのは旅先だった。

定年退職したら一人旅に出ようと決めていた。体力に自信はないものの、若い頃の気ままな旅が忘れられず、年甲斐もなく老年バックパッカーとして、再びチャレンジしてみようと思いついた。行き先は迷うことなくアジアと決めていた。

バンコク、ヤンゴンと巡り、ミャンマー中部の古都マンダレーの駅に降り立ったのは、家を出てから二週間ほど経っていた。そこから大河イラワジ河を船で下り、無数のパゴダの林立するパガンへと向かった。

歴代の王が次々と建てた大小さまざまなパゴダが点在する風景は、確かに見応えのあるものだったが、一帯は外国人観光客向けに整備されすぎ、庶民の生活臭がなかった。

パゴダ見物にも多少飽きてきたある日、宿泊している安宿で自転車を借り、近くの町へと出かけた。三キロほどの距離だったが、緩やかな起伏の続く道の所々には、細かな赤い砂が積もっていてタイヤを取られ、進むのに苦労した。日も高くなり暑さも増してくる中、思ったよりきついサイクリングとなった。

汗だくでペダルを漕ぎ町にたどり着いた時は、汗と砂まみれになっていた。路地脇の共同水くみ場で女性たちが洗濯をし子供が水をかぶっているのを目にし、周囲に目で挨拶した後、手足と顔を洗わせてもらう。近くの女性が、黙ってバケツと石鹸を貸してくれた。

さっぱりしてから、市場入口の電柱に自転車を繋ぎ、狭い通路が入り組んだ中を分け入って進むと、掘っ立て小屋とでも云えそうな店が並んでいる一角に、小柄なハナコ婆さんはいた。

お世辞にも高級とは言えそうもない売り物の布地に囲まれて、わずか三、四坪ほどの板敷きの店に、背を丸めて座っていた。傍らにいる若い孫娘にどこから来たかと問われ、日本人だと告げた時だった。ハナコ婆さんは急に顔をあげ、いきなりその小さな手で私の腕をつかんできた。突然の彼女の反応にあっけにとられ、私はたじろいだ。それまでの老婆の顔つきは一変し、大きく目を見開き、体に似合わぬほどの大声で叫んだ。

「ジャパン・ネーム、ハナコ……ハナコ……！」

「エッ、ハナコ、日本人？……でもどうしてここに……」

私は彼女の迫力に圧倒され、事情がよく呑み込めない。

「あなたの名前はハナコで、日本人なんですか」

彼女は何度も「ハナコ」を繰り返すだけだ。よく分からない。

何度か聞き返し、彼女の片言の日本語と英語の単語をまじえた説明を繋ぎ合わせていき、次第に事情が分かってきた。

どうやら若い頃、日本の兵隊と交流があつて、彼らからハナコと名付けられたらしい。だが彼女が今何歳になるのか、英語で尋ねてみるが、どうも本人にも分からないらしい。状況から考えて八〇歳過ぎと推測された。

第二次世界大戦中、ハナコさんがおそらく十代だった頃、かつてビルマと呼ばれたこの国には、多くの日本軍兵士が進駐していた。その頃の彼女がどこで、どのような暮らしをしていて、日本兵とどんな交流があつたのか。ハナコと名付けられたビルマの一少女の目に、日本軍はどう映つたのか、興味が湧いた。だが戦時中の話を聞こうにも、ビルマ語を解さない私と、片言の英語とさらに片言の日本語のハナコ婆さんとは話が通じない。

齒がほとんど欠けている彼女の口から、もどかしそうに繰り返してくるのは、「ジャパン・ネーム、ハナコ」と日本兵が所属していたらしい「サクラ・ブタイ」という言葉だった。日本の兵隊たちに対する彼女の思い入れの深さは分かつたものの、残念ながら、それ以上の詳しい内容を聞き出すことはできなかった。

別れ際、ハナコ婆さんは傍らにあつた小さなオレンジ二個を私に差し出し、「プリーズ・カム・アゲイン」と手をきつく握って言った。私は皺だらけのその小さな手に、紙幣を一枚握らせ、彼女が知っている数少ない日本語の「アリガトウ」と「サヨウナラ」を告げると、彼女も「ア・リ・ガ・ト」と繰り返した。

帰国後もずっとサクラ部隊が気になっていた。

図書館でビルマ関係の資料をいくつか調べた。しかし菊兵団というのは繰り返し出てくるのだが、サクラ部隊の文字は見つけることができなかった。やがて旅のこともハナコ婆さんのことも忘れかけていた。

一年近くもたつたある日、たまたま戦時中のビルマ戦線に関する本を読んでいると、ふと巻末の「ビルマ方面軍、組織編成表」に目が止まった。第十五軍、三十三師団、歩兵二一四連隊、連隊長、作間喬宣（さくま・たかよし）大佐とあつた。私はピンときた。ハナコ婆さんが繰り返し言っていたのは、サクラ部隊ではなくサクマ部隊だったのだと。彼女が勘違いして言ったのか、自分が勝手にそう思い込んでいたのだ。

記録によると、戦争末期、日本軍は英国軍の反攻を阻止しようと、先手を打ってビマ北西部、インド領インパールへの侵攻を企てた。世にいう「インパール作戦」に、この作間部隊も関わっていたらしいと分かった。強力な英軍の物量と航空機による反撃に遭い、二千メートル級のアラカン山脈の密林地帯で日本軍は行く手を阻まれ、やがて補給も絶え、装備も食料も底をついた。激しい雨期の季節を迎え、兵士達の多くは言語に絶する苦戦を強いられ、インパールを目前に撤退した。

敗走する状況はあまりに悲惨で、数知れぬ日本軍兵士の遺体が森や河、密林の小道沿いに連なり、後に「白骨街道」とまで呼ばれる光景が繰り広げられたという。

ビルマ方面にいた三三万の日本軍兵士は、一九四五年八月、連合軍に無条件降伏した時には、一四万人に減っていた。遠い異国で、望郷の思いに駆られビルマの一少女にハナコと名付けた兵隊たちは、その後一体どうなったのか。私には分からなかった。

旅で出会ったあの国の人々は、日本にかなり好意的だった。ハナコ婆さんも日本人を悪く思っていないのは、涙を流しながら私の手を握ってくれたことから分かった。ひよっとして長い年月の中で戦時中のイヤな記憶は風化消滅し、自分が若く、華やかだった青春時代の思いだけが残ったのかもしれない。

今でもあの一人旅を思い出すと、ハナコ婆さんの皺くちやの顔と、道の上に模様を描く細かく赤い砂、そしてなぜか見たことも会ったこともない、かつての日本兵の姿が、脈絡無く私の脳裏に浮かぶ。